後くるゝこと約三週日に亟んとしたので、已むを得ず南方支那の游覽は極めて粗となり、特に廬山、天臺、杭州、寧波等、我邦佛敎と頗る密接な關係を有する地方に歷游し得なかつたのは、余輩の最も遺憾とする所であるが、是れは爻他日の機會を俟つことゝする。

君府の思ひ出

文學博士　坂口昂

三、君府の名稱

天下の王城としての君府の概觀を諸君の眼前に展開したあとで、私は茲に特に名稱の上から、同やうに、如何にそれが世界の帝都らしきかを語つて見やう。

今のコンスタンチノープルの主要部は、諸君の知れる如く、名づけてスタンブールと呼ばれて居る。この名稱が果して何に由來するかは頗る興味ある問題であるが、これは後廻はしとして、先づ古き名稱ビザンチオンから說かなければならぬ。

スタンブールそれ自らは金角灣と大理石海（マルモラ）との間に於て牛渡海峽（ボスフォロス）の入口に向つて東方に突出した一個の三角形の小半島である。その尖端は地勢やゝ北に曲りてセライ岬 Serai Point となる、即ち古のボスフォリス・アクラである。今は此尖端の內面に於ける海岸線が泥沙に埋もれたる故にや、やゝ鈍狀を成して居るが、ともかくこの突出は金灣灣內の港を抱いて、古今を通じて無比の良泊をしつらへて居る。この鼻の高地に、古の希臘人がまだ來住しなかつた時、古トラキヤ族が棲みて自已

の住地を名づけて呼んで居つたのが、即ちビザンチオンであつたのである。この古名は紀元前六六七年、當時尤もポントス方面に向つて活動した希臘人の一、メガーラ人によつて植民されて、早く盛んな希臘の市となつても尙ほ依然維持された。たゞし、羅馬帝政時代に、この市は一人の荒ぶる君(Septimus Severus)の逆鱗に觸れて怖ろしき破壞(紀元後一九六)と共アントーニアとの改名を强ゐられにが、これは只だの一時の嵐と過ぎ去つた。かくして、希臘人の支配から數へても約一千年の久しき星霜を通じて、ビザンチオンの床しき名が天下に傳稱されたのである。

時は、紀元後の第四世紀の四分の一すぎ、この度は他の一人の羅馬皇帝のこよなき恩寵がこの市に降つた。といふのは、申すまでもなく、一天萬乘の君が親しくこゝに來住しますことになつて、その御名を賜はりコンスタンチヌスの都(ポーリス)と改稱されたことである。爾來今日に至るまで一千六百年間、この御名は、つぎ〳〵の天下一統を稱する君主の鎭座と共に、傳唱されて絶ねず、今後も尙ほ長へに存續してやまないことであらう。成程、この羅馬の統治(インペリウム)を承けついだ一英雄が、古代希臘世界の要津たる牛渡(ボスフォロス)のほとりへの遷都を決行して、自ら及び自己の後繼者が、さながら神の如き東洋風尊嚴の御位に上ぼつたことは、古來今往、世々人々をして、都の名を保持してこの一大盛事を永久に紀念せんと欲せしめるであらう。

しかし、この大なる「都の后(クヰーン・オブ・ゼ・シティース)」の懷に抱かれて居る歷史の情味は、極めて深長なるものがあつた。その名づけぬしの偉じき個性と强き記念とを以てしても、只だこの一人の名によりて專らに呼ばはれ行くだけでは、到底都の物のあはれを象徵するに足らなかつた。さすがに世人の文化感には、希臘文明の餘澤を偲ばすべき古きビザンチオンの名

は尤も棄てがたくあつた。また、これと同時に、天下をしろしめしたる儼めしい神ローマの殘んの稜威も一朝に消え去るべくもあらず。されぼコンスタンチヌスの都はなほ久しくその古名ビザンチオンとも、はた新羅馬とも呼ばれ、その住民も、彼等全體として、みづからビザンチオンとも、又たローマイオイ(Rhomaioi, Romae)とも名乘るがその常であつた。

畢竟、コンスタンチノーポリスは官廳の命名したる公稱であつて、ビザンチオンとローマとは歴史感の保持したる文化名稱である。ローマの名は政治上文化の傳統から避けがたく、ビザンチオンのそれは精神的文化の潮流から離れることが出來なかつた。隨つて後者の關係からビザンツ文學、ビザンツ美術、ビザンチニズムなどてふ概念と知識とが成立した。若しそれ前者に至つては、今日といへども、希臘人はみづからローマイと名乘りて、東方の民族の通稱たるサラセンや、小亞細亞の土耳其名稱たるアナドーリ(Anadoli 東方の義)にも對立し、また西方人民の通稱たるフランク(ラテン)から區別して居ることを指摘したい。げに、このローマイといふ名はバルカン半島の希臘人みづからの一種の誇りの名である。中古の歴史を通じて、バルカン半島、少くともその希臘人口の住居する地方が、ローマニヤと呼ばれて來た。その名殘が今も尙ほ存するのである。今日、十九世紀のローマンチックの產物たる希臘王國は自らヘルラスと名けて居るが、これはその官廳とその學者が復活したる古典名に過ぎない。その人民は、民俗上から、羅馬帝國以來の名稱たるローマイを自ら稱して居る。蓋し、はじめは、地中沿岸の一切の開化地方を包容する羅馬帝國の官公民として帝國の內外に住する蠻夷から自から區別するに用ゐた名稱であつた、サラセン人の地理書に地中海を

ルーム(Rûm羅馬)の海と呼んで居るのは、その名殘である。それが、今は、昔の蠻夷即ち東方人に對照する意味をなほも保持して居ると同時に、中古以來、一旦北狄の移動をうけて荒れすさみて、政治も經濟も敎會も風俗も、希臘人からみれば、非常の懸隔に陷りたる西方人、、フランク若くばラテンに對照する自尊の名稱ともなつて居るのである。そこに歷史の興味が存して居るではいか。

その外に尙ほ一つ忘じがたき名稱がある。それは君府の尊嚴を尤もよく象徵するものである。

中古以來近代に至るまで、ビザンツ文學乃至新希臘文學にも裏書きされて、單に都 (ἡ πόλις, the City)と呼ぶが、希臘民俗の習はしとなつて居る。これは一切の希臘語の行はるゝ地方の習慣である。今日の希臘王國の內でも、都といへば、吾人の常識からいへば、たしかにその首府たる雅典であるべき筈であるが、實はさうでない、依然昔の

如く君府そのものを指して居る。これを一層文學的に飾ることがある、それは帝王(バシレオス)といふ尊號を副へて王城若くば帝都 (Basileousa Polis, Basilis Polis)とも譯すべき華々しき稱呼とするのである。今日希臘の政治家ヴエネゼロス等の大希臘主義者の理想が那邊に在るがゞこれで推想せらる。

同じ意味の名稱はビザンツ文化の勢力の及ぶところに擴がつて居る。

北方ゲルマニ人、殊には第九世紀以來スカンヂナウイヤから、東路(アウツルウエヂル)(Austrvegr=Ostweg)、即ち今日の露西亞の湖と川筋とを利用して露西亞人の祖先の中に入り込みその建國を成しつゝ、ワリヤーグ(Wariag, Waräger, Warangians)てふ漂泊の荒武者として君府に南下した北人らは、これにミクラガルド(Mikligardr, Miklagard)といふ名を擬した。蓋し恰もこの時期にビザンツ皇帝ミカエル(Michael III 842-867)が治世して居つたからであ

らう。既にしてスラーヴ民族がビザンツ文明に化せられて所謂希臘スラーヴ文化社會を形造るに隨ひ、この民族は君府を以て一切の高遠なる慾望の目的地と崇めた。猶ほ一切の西方世界の人民がチベル河畔の舊都に向つて傾葵するが如きであつた。彼等は希臘人の言ひ習はしに準じて、牛渡峽(ボスフォラス)頭の大都をよぶに「ザールの都(ツァラード)」(Carigrad)を以てすることになつた。かくの如くして、露西亞人もブルガリヤ人も自己の南下すべき理想の都として切りに君府にあこがれた。その狀、アドリヤの海からキプロスの島まで、オデッサの埠頭からアレクザンドリヤの港まで、擴がつて居る一切のヘルラスの兒らの思ひが、この歐亞海陸交通の焦點に集中していや燃ねにもねて居ると同樣である。

然らば冒頭に引用した今日オスマンリ・トルコ人らが呼んで居るスタンブール(Stambul, Istambul, Istanbol)は如何に說明せらるべきか。

先づこの稱呼の適用範圍を決めておかう。歐洲人はこれを前述したる金角灣と大理石海(マルモラ)との間の三角形の半島、即ち舊コンスタンチノープルだけに用ゐて居る。而してこれと、ペラ及びガラタと、スクータリと、以上三大部を合せて之を總稱する場合にはコンスタンチノープルを使つて居る。これが通例の使用法である。しかし君府の今日の主人公土耳其人はこれを廣狹二樣に使つて居る。即ち舊コンスタンチノープルにも、又たは上述の三大部を合はしたいはゞ大コンスタンチノープルにも、時と場合でスタンブールを用ゐて居る。

さてこの名稱の最初の說明はニケフォロス・ローマノス(Nikephoros Romanos)の俗語文典に現はれたといふことである。之を、かの十七世紀の佛蘭西の學者デュカンジュ(Ducange)がその「中古及その後の希臘語彙」に於てポーリスの語の下に引用したから、この說明は西洋一般に行はれる

ことになつた。これに據ると、スタンブールはEis ten polin エス・テン・ポリン、即ち to the city から來たとある。そして爾來、當時土耳其人が偶々都に行きつゝある田舍人に向つて都の名を尋ねたるに只だ「都へ」エス・テン・ポリンと答へたのだらうとの、極めて他愛もなき逸話的說明が行はれて居つた。

しかし論戰は知識の母である。先づ語の上からの疑義が起つた。それから一の新對案が出た。それは何人も容易に想ひ附きうるコンスタンチノポリスの短縮であるといふ說である。この新說に對して更らに舊說エス・テン・ポリンを維持し、之を東西の文獻の上から且つは證明し且つは改良完成することになつた。これによるとスタンブールの名稱は土耳其人の君府征服以前から存在し、實にサラセンの學者にも支那の史書にも現はれて居ることが分明した。

ユールのカタイ（Yule, Cathay and the Way Thither, vol. II. Tokyo, pp. 402 & f. n. or Hakluyt Society 1910. vol. IV. pp. 8. & f. n.）に據ると、サラセンの學者マスーヂ Masudi（紀元後九世紀）は既に希臘人はその都をコンスタチニヤと呼ばずしてボリン Bolin といひ、且つこれを帝國の首府としてはスタンボリンといふと證言し、その後に現はれた有名なイブン・バツータも、君府がコンスタツチノーポリスと呼ばれずして、エスコンボリ（Escomboli, 蓋し Estomboliの誤か）と稱して居るのである。

次に支那人の間に傳はりたる名稱につきては、紀元後七世紀乃至八世紀に遡り得るのである、（ユール前記の塲所、並に同書第一卷序論第三十二——三十四節）。唐書西域列傳百四十六拂菻傳の拂菻古大秦也云々は正しく Folin 又は Fulin にして polin に當ると考へらる。ヒルトは大秦が羅馬帝

國の東方に於ける代表地方たるシリヤたる以上は、拂菻はシリヤなりとし、隨つて拂菻の都を古音によりて Buthlin とし、パレチナのベトレヘム Bethlehem に當てたといふ(私はヒルトの原論文たる China and the Roman Orient と The Mystery of Fulin, 1910とを參讀すること出來なかつた)ことにつきて、その前部は尊敬すべき議論なれども、そのベトレヘム説は拂菻の記事と君府及びベトレヘムそのものと比較して、内容上から想定してどうも如何はしく思はれるのである。

加ふるに土耳其の君府征服以前に於けるビザンツ帝國内の中古の地名を見るに、君府の當時の稱呼と考定せらるゝエス・テン・ポリン、若くばイスタンボリに類似する地名の作り方が多々發見せらるゝのである。例へば世界史上最も有名なる地名だけを擧げると、

ニキヤはイスニク(Nikaia—Isnik)

ニコメヂヤはイスミド(Nikomedia—Is(nik)mid)

アテーヲはセチネス(Athene—Setines)

コスはスタンコ(Kos—Istankōj, Stanco)

となつて居るが如きである。

而して ten が tan に變じ、第三格の代りに第四格 polin を用ゐることは地名の形として當時の習はしであつたことが學者の研究によつて分明した。

してみれば、デユカンヂユ以來傳へられた説明は大體に於て當を得て居る。即ちスタンブールは都(ポーリス)から作られれエス・テン・ポリンといふ土耳其人の君府征服以前の古い造語であつて、ひろくサラセン人にも支那人にも知られて居ることが確立した。かの都へゆく田舍人が土耳其人に答へたからだ、といふ逸話的流傳は一笑に附すべきものとなつた。さればとてコンタッチヌスの都の名がスタンブール形成に全然無關係であつたとは、事實上信ぜられない。その的接の語源には關係はないと

しても、コンスタンチノーポリスといふ屢々歷史に談り傳へらるゝ稱呼が、スタンブール形成に多少協力寄與したかも知れぬと思はれる。

所詮、民俗的稱呼たるスタンブールの名が、他の諸名稱と同じく、尙ほ依然として天下の王城、世界の帝都としてのポーリスてふ意味を中核として居るものであることは確實である。時に回教徒がイスラムブル（信仰の都Islambul）と呼ぶことあるは、彼等が自家の思索界に適應すべくスタンブールを牽强附會したに過ぎない。（Pauly-Wissowa, Real-Encyclopaedie der Class. Altertumswissenschaft: Constantinopolis 參照）

（此項完了）

度會家行の勤王に關する史料

大西源一

元弘の變に外宮長官檜垣常昌が勅命を承りて武家調伏の祈禱を爲しゝより、宮後朝棟、村松家行相踵で南朝に志を寄せ、殊に家行神主が當時神宮唯一の學者として、南朝の柱石たる北畠親房公と思想上最も密接の關係を有せることは、余輩が本誌第二卷三、四の兩號に亘て連載せる「南朝の隱れたる勤王家―伊勢度會氏―」中に論述せるが如し。然るに余輩が本研究を發表したる後程なく、江見淸風氏は京都市田中勘兵衛氏の許にて家行神主勤王事蹟に關する有力なる文書を發見せられ、余輩の所說に最も確實なる裏書を爲すを得たるは、誠に近來の快心事にして、私かに欣喜に堪へざる處なり。此の文書は、家行の反對黨なる北朝側の者共より家行が平素南朝に加擔して東奔西走